

## 医学はひとつ「One Medicine・One Health」

### ～ 人も動物も共通 ～

ダクタリ動物病院 総合院長 加藤 元

「One Medicine・One Health」とは、「人間の医学」も「動物の獣医学」も共に医学であり、共通であるという理念です。この理念を追求することが、即ち、人と動物、双方のクオリティ・オブ・ライフを高め、社会的にもより貢献できるということになるのです。

世間一般の多くの皆さんは、動物は動物特有の病気にはかかからない、獣医師に人間の病気の事は分からない、獣医学は人の医学より劣っているなどという先入観を持ち、そして長い人類の歴史の中で、医師・獣医師の間でもそれが常識化しているではないでしょうか？

しかし、それは大きな勘違いです。人間の医学も動物の獣医学も本質的に同じ、唯一のバイオメディカル・サイエンスそのものであり、誰に応用しているかということだけが違うのです。その証拠に、実は真菌や細菌が元で起こる感染症の多くは、人と動物の隔壁はなく、共通だということです。その他にも、虫歯や緑内障・白内障から、ガンや心臓病、心筋梗塞、さらには精神疾患でさえ、動物たちもかかる病気なのです。近年、何かと話題のメタボリック症候群も例外ではなく、動物たちも同じように悩まされています。

誤解のないように述べておきますが、ある感染症にかかった動物と接触すれば人間も同じ感染症を発症する、と言っているわけではありません。例えば「猫エイズ」に発症した猫を飼っているからと言って、人間(猫以外の動物)には感染しません。人のエイズは人にだけ、猫のエイズは猫にだけ感染するウイルスだからです。

細かい事を言えば、このようにその動物特有の病気も存在しますし、特有の薬を用いる場合もあります。しかし、診断・治療において根本的なメカニズムは人も動物も同じ、病態生理学・医学は一つ、という考え方がバイオメディカル・サイエンスであり、「One Medicine・One Health」なのです。

動物診療の中で得た知識を人間に応用することもでき、またその逆も大いにあり得るのです。多くの方がご存じのように、人間が服用する薬はすべて、世界共通、まず動物で試されてきたという事実が何よりもそれを証明しています。

また、「人と動物」という言い方(区分け)をしますが、一概に“動物”と言っても、小さなハムスターや小鳥から犬や猫、果てはトラや馬や象など多種多様な種類がありますが、人は“人という哺乳動物”であるだけなのに、“人は万物の霊長であって、その他の動物とは全く違うのだ”という考え方になってしまいました。

しかし、人間の医学だけが特別なのかどうか、考えてみてください。もしそう思いこんでしまっていれば、本来、医師や獣医師が広い視野を持ち、人・動物に関わらず、多くの病気の知識を持つ

とさえすれば、より早く、より正確に診断し、より合理的に治療することができるケースを、どちらか一方の知識しかないために、最善の治療ができないということが起こる場合もあるということです。それは私達人間にとっても、また動物にとっても、不幸なことであるという点でも同じだと言えるでしょう。

その実例として、TED(NHK E テレ「スーパープレゼンテーション」でも紹介されている)、アメリカ・ロサンゼルスのカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校(UCLA)医療センター(大学教育病院)の医師である Barbara Natterson-Horowitz さんが講演をおこなっています。

大変すばらしい内容で、分かりやすく述べられていますのでぜひご覧ください。また、和訳も付いているのでご紹介しておきます。

**「獣医師が知っていて医師が知らないこと」/バーバラ・ナッターソン・ホロウィッツ \*TEDより**

[https://www.ted.com/talks/barbara\\_natterson\\_horowitz\\_what\\_veterinarians\\_know\\_that\\_doctors\\_don\\_t?language=ja](https://www.ted.com/talks/barbara_natterson_horowitz_what_veterinarians_know_that_doctors_don_t?language=ja)

ところで、獣医学の最先端はやはりアメリカですが、現在でも、アメリカと日本の差は想像しているよりはるかに大きなものです。

なぜかという、医科大学や獣医科大学の社会や学生に対する姿勢、教育内容や臨床訓練の内容が大きく異なっているからです。さらに言うならば、学校の仕組みや学生選抜の方法が絶対的に異なっているのです。

私は45年前、借金をして、39歳で初めてアメリカに行ったのですが(それ以来、毎年数回、内科学会、外科学会、救急・救命、クリティカルケア学会、全米動物病院協会等の年次大会に参加して参りました)、当時、アメリカの獣医学教育における「オーガナイズド・ベテリナリーメディスン(Organized Veterinary Medicine)」は、群を抜いており、世界中の獣医科大学の目指す基準はすべて全米獣医学会、全米獣医師会の基準でした。

残念ながら、いまだに日本には、その全米獣医学会/全米獣医師会の獣医科大学の基準を満たす大学は一枚もありません。

日本では、いまだに医師を養成する医科大学が医学部と呼ばれ、大学の大学病院は医学部附属病院と呼ばれていますが、アメリカの医科大学は大学病院そのものが大学なので、大学教育病院と呼ばれています。日本ではそのような大学はまだ存在しません。

さらに、獣医学科を持つ大学は日本に16校ありますが、すべてが全く異なっています。アメリカで行っているような教育をおこなっている学校はありません。

近年、さすがに日本でもその遅れに気が付き、良い方向を目指すようになってきました。日本は世界の経済大国であり、科学技術においては、そのすべてにおいて、世界のトップクラスです。にもかかわらず、医学・獣医学・歯学教育に関してはそのような状況が続いているということは、理解しがたいことです。

私が客員教授(Affiliate Faculty Member)とアンバサダー(Ambassador)の名誉をいただいている、アメリカのコロラド州立総合大学の獣医・生物医科学科大学 College of Veterinary Medicine and Biomedical Sciences]で、「バイオメディカル・サイエンス(生物医科学)」とは何かを学ぶようになり、そこで獣医師の一員として痛感したことは、科学とは何か、誰のものなのか？ということでした。

獣医生物医科学も科学と言う学問の中の一つのカテゴリーであり、誰のためにあるのか？誰のものなのか？この科学の本質は何なのか？ということでした。

獣医学獣医療・医学医療は共通であるという「One Medicine One Health」理念に基づくと、“法律的に、職業上の免許が、獣医学と人医学に分かれている”というだけで、我々が学んでいること、そしてそれを実践することは、まさにワンメディシン＝バイオメディカル・サイエンス＝生物医科学そのものなのだとと言えます。

獣医学・人医学とはそれを「どの動物に応用するか」によって、つまり、犬と猫、その他の動物に応用するか？さらに人に応用するか？ということが違っているだけであるということが良くわかってもらえると思います。

これを読んで頂いた日本の医師、獣医師の皆さん、ぜひ、視野を広げるため、人・動物分け隔てなく、さまざまな医学書を読み、セミナーに参加し、学ぶ機会を求めてください。

そして医大、獣医科を持つ大学の関係者の皆さん、ぜひ、“人と動物は共通“という「One Medicine One Health」という意識を学生に持たせ、そのような実学のカリキュラムを編成してください。

医学はその名の通り、学問(学問＝科学)です。そして、すべての学問は日進月歩です。既成概念にとらわれず、強い信念を持って常に新しい知識を追い求めること、それが人と動物、すべての医療を向上させることにつながると、83歳の現役獣医師として、私は強く信じています。